

Title	ピーター・ゲイ著 長尾克子訳『ベルンシュタイン： 民主的社會主義のディレンマ』 関嘉彦著『ベルンシュタインと修正主義』
Sub Title	Peter Gay, "The dilemma of democratic socialism", trans. by Katsuko Nagao Yoshihiko Seki, "Bernstein and revisionism"
Author	奈良, 和重(Nara, Kazushige)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1981
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.54, No.5 (1981. 5) ,p.117- 123
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19810515-0117

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紹介と批評

ピーター・ゲイ著
長尾克子 訳

『ベルンシュタイン』

——民主的社會主義のディレンマ——

関 嘉彦 著

『ベルンシュタインと修正主義』

マルクス主義思想史のなかで、ベルンシュタインの評価は一般的には依然として低い。ひとつの例証にすぎないのだが、徳永恂編・『社会思想史』（弘文堂、昭和五十五年刊）のなかの一論文を取りあげてみよう。そこでは、ベルンシュタインの修正主義に対して、ルカーチの批判が際立つて論じられている。「ベルンシュタインの見方は、歴史のうわべの人事実Vにのみとらわれて、歴史の奥底のへ動向Vを見ないものであつた、とルカーチは指摘する。ベルンシュタインは、統計的に処理された数量関係によつて社会的人事実Vをとらえたうえで、現代社会の動向について判断を下していた。しかし、むしろこの前提こそ問題がある。……社会的事実を正しくとらえ

るためには、表層に現れたこの事実と、その内部の、社会の歴史的な動向とがからみ合う核心との区別を知つていなければならない。ベルンシュタインは、このことを見落していた。」（前掲書、九六頁）。ルカーチは、歴史の表層にのみとどまる「形式主義」、その個別的事実にとどまる「経験主義」、あるいは事実にあるべきものを対置する「ユートピア主義」に対して、マルクス主義の核心にある「全体性」(Totalität)のカテゴリーを把握した。

さらに、ルカーチのマルクス理解に特徴的である「認識の主体と客体の同一性」という立場について、「労働者階級の視点からの認識は、この階級がすでに客観的に位置づけられ、それに向つて開かれて新しい歴史過程を、すなわち、資本主義社会を超出しこれを見晴らすへ現実Vを、言い表わす」（同書、九八頁）のであり、まさにこの現実がそれ自体として労働者階級にとつてのあり方として意識されるのである。労働者階級は、みずからの実践によつて歴史過程、つまり革命過程に入りこむのであつて、ここに理論と実践との統一というマルクス主義の意味が成り立つ。かくて、「労働者階級の階級意識は、このような理論によつて形成される。それは、この階級が置かれている歴史的状况の自己意識であり、この階級がいてい日常的心理学的意識ではない。ルカーチから見れば、ベルンシュタインは、この区別を見落して、個別の利害にまともわりつく日常的意識を、社会的事実として、それ自体何か価値あるものとみなし、資本主義社会の枠内にとどまつてしまつた。いますでに、歴史の新たな次元における進歩を促す客観的条件は熟している。

労働者階級は、その階級意識においてこの条件を意識し、それによつて実践すればよいのである。この意識化こそ、現在の歴史過程が踏み出さざるをえない決定的な一歩である」（同書、九九頁）と。

いまここで、ルカーチのマルクス主義を論じることが当面の目的ではない。ただ彼のベルンシュタイン批判について、あえて述べておくとしたら、ベルンシュタインにとつて事実認識というものは、それがたんに客観的所与としてあるというのではなく、人間の実践の歴史的所産にはかならなかつた。それ故に彼自身は、社会的現実における事実やその矛盾的性格、現実と理論とのへだたりに指摘せざるを得なかつた。ベルンシュタインの場合に、事実に対してザッハリツヒな態度を採ることは、たんに現実を意識内部で受容することではなく、かえつて現実への一層深い洞察と批判を増大させることになつたのだ。そして当然のことながら、事実および事実にもとづく議論の举证責任は、事実を常に考慮する人びとではなく、それを否認する人びとにこそある。しかしそれにも不拘、資本主義的物象化に対するプロレタリアートの革命的意識の弁証法を復元しようとする者は高く評価され、平和的、漸進的、民主主義的に理想主義的社会へ向う運動を擁護し、理論の科学性を問い、それを修正しようとする者は、その浅薄さを蔑視され、かえつて遠く疎まれるのである。ルカーチ文献の多さに較べて、ベルンシュタインのそのの乏しさが何よりの証左であろう。かかる知的状況のなかで、ベルンシュタインの空白を埋めてくれる貴重な二つの研究がほぼ同時に現われたことは意義深い。

ピーター・ゲイの著作は、『ワイマール文化』から最近の『芸術を生みだすもの』にいたるまで、我が国に数々の翻訳がある。これらを一貫してゲイは、思想家（あるいは芸術家）の個人的・歴史的体验からその思想（作品）形成にまつわる複雑多岐な諸原因を探究して倦まない。『民主的社會主義のディレンマ——マルクスへのエドゥアルト・ベルンシュタインの挑戦』は、一九五二年の出版であつて、彼の博士論文にもとづく処女作品であるが、そこに描かれたベルンシュタインの人間像・思想像は、今日にいたるもなお光彩を放ち、すでに古典的名著たるにふさわしい。

関嘉彦教授については紹介の必要もないであろうが、我が国の社会思想研究の碩学として社会主義に関する多数の著書がある。今回の『ベルンシュタインと修正主義』によつて、またひとつの学問的寄与がなされたわけなのだが、その「はしがき」のなかで、関教授は次のように述べられている。「私が初めてベルンシュタインの名を聞いたのは東京大学経済学部在学中、河合栄次郎教授の演習に参加しその討論の中においてであつた。その時以来、彼の思想に関心をもちつてきたが、本格的に研究しだしたのは、戦後東京都立大学に奉職してからである。私は、日本における社会主義の実践に関心をもちつてきたが、当時は社会主義といへばマルクス・レーニン主義以外には存在しないかのような知的雰囲気であつた。そのような雰囲気反発を感じて民主社会主義の体系的な研究を始めた。その第一歩として始めたイギリス社会主義及びイギリス労働党の研究を一〇年程前に一応区切りをつけ、いまひとつの民主社会主義思想の源泉で

あるベルンシュタインの修正主義の研究を始めた。しかしその資料が日本では容易に入手できないので、一時その研究を諦めていたが、数年前から早稲田大学に講義に行くようになって、その図書館所蔵の小寺文庫の中に、ベルンシュタインやドイツ社会民主党関係の資料がかなりあるのを発見して、その研究を再開した。そして毎年夏休みの二ヶ月は長野県の富士見に閉じこもつてその研究に専念した。その研究成果をまとめられたものが本書である。

これら二書によつて、ベルンシュタインの修正主義なるものをわれわれは、理論的に厳正に理解することが可能であるばかりか、その歴史認識がベルンシュタインの歩みきたつたひとつの歴史的運命であつたかのごとく、彼の生涯をつぶさに追体験することである。ともかく、直接読まれることが望ましいが、以下には、彼のマルクス主義批判の主要テーマをめぐつてわれわれの現代的な討議のために重要と思われる部分を若干論じておきたい。

マルクスおよびエンゲルスの思想は、ベルンシュタインの精神の奥深くに浸透していた。多くの著名な社会民主党員との共同執筆になるマルクス死後四十周年記念の小冊子のなかの次の言葉は、いかに彼がマルクス主義の影響を受け、かつ正しくそれを評価していたかを明瞭に表わしている。「マルクスの偉大さは、一般的社会発展と諸階級の政治的運命との密接な関連を明らかにした点のみあるのではない。この点のみなら他の人々もおおざつばながら認識していたことである。マルクスの偉大さは、経済的發展の徹底的研究に基づいてこの関連について真に科学的な理論を生み出したことにあ

る。……社会主義にとつて決定的なものはその歴史哲学である。即ち一方における生産力の發展、階級構造、階級の成熟という経済的展開と、他方における組織、権利、勢力、各々の階級及びその成員の社会活動という政治的展開との間の密接な関連を認識することである。これを把握しえないものは、たくさんのマルクス主義の公式について、いかに熱弁を揮うことができようとも、マルクスを理解したものとはいえない。……マルクス主義は洞察力であつて処方箋ではない」(ゲイ、一〇四―一〇五頁、傍点は筆者)。それ故に、ベルンシュタインの修正主義への移行は容易なことではなかつた。「それまで深い信頼を寄せてきた理論体系の批判者となることは大きな苦痛であつた。修正主義も依然としてマルクス主義であるという非現実的主張を彼が行つた主な理由は、恐らくここにあつた」(同、八二―三頁)。だが他方で、マルクス主義に内在する問題性を透視しえられはこそ、同時にその歴史哲学——唯物史観を放棄し、政治的实践としてのマルクスの予見——プロレタリアートの歴史的・革命的使命を否認することを可能ならしめたのだ、とも言えよう。

ベルンシュタインのマルクス主義批判の出発点は、「資本主義の内部矛盾による崩壊の必然性に立つ革命必然論の展望を主張する『エルフルト綱領』の批判であり、その論争の前提条件として彼は、マルクスの唯物史観を批判した」(関、一一五頁)のである。その論点の第一は、人間の理念や意志をふくめてすべてのものを物質的運動——歴史の起動因としての経済的諸力へと還元する一元論的必然性、および、歴史の究極目的についての決定論的な解釈と救済に対して向

けられ、かかる唯物論は「神なきカルヴィン主義」に比定される。ベルンシュタインは、「すべてのものをひとつのものから演繹し、すべてを同一の方法で処理しようとする教条主義的衝動」に対抗する「折衷主義」—— 関教授が指摘するとおり、それは科学的方法と矛盾しない、eklektisch または synkretisch な方法であつて、現代的に言えば、多元論的な見方というべきである(同、一〇九頁)—— を「冷静な悟性の反逆」として擁護する。第二に、マルクス理論に継承されたヘーゲル弁証法を、ベルンシュタインは激しく批判する。彼にとつて「一つの哲学的方法を受け入れるかどうかはそれが所与の事実関係の説明に有効であるかどうかにかかつているのであつて、もしそれが事実の展開と矛盾するのであれば他の理論にとつて代えられねばならない」(ゲイ、一七七頁)。したがつて、弁証法の大きな危険は、「空虚な思弁」によつて経験的世界を完全に棄て去るところにあり、人間認識の限界を越える弁証法の自己展開は、「先験的に世界像を構築することになり、かえつて科学的認識を妨げることになる」(関、一一二頁)。もうひとつの重大な結果は、暴力による社会革命へのマルクスの傾斜であつて、否定の否定という論理は、暴力的破壊による新しい社会の創造という歴史的自己欺瞞に導く。

このように、ベルンシュタインの修正主義は、「マルクス主義に對する知的批判」に力点を置き、「倫理的社会民主主義的世界観の確立」をめざした点で、一般的な改良主義とはつきり区別される(ゲイ、三三三頁)。しかもわれわれは、「単にマルクス主義の修正にとどまらず、民主社会主義の思想を、それに代るものとして大胆に

提唱したという点にベルンシュタインの特色があるとすれば、彼のイギリス滞在が彼の思想の変化に大きな影響を与えたことは否定できない(関、八八頁)としても、彼自身の理論構造を哲学的ないしは方法的に規定したものは何か、をあらためて問ひ直さなければならぬ。「社会哲学的な新カント主義の主張が頂点に達したのは、ちょうどエンドウアルト・ベルンシュタインが修正主義を打出し、弁証法を捨てた一八九〇年代に當つていた」(ゲイ、一八六頁)ことを想像せば、「ベルンシュタインはマルクス主義の諸々の基礎を放棄しながらも依然として確信的かつ活動的な社会主義者であつた。それにして銘記すべきは、彼及び修正主義がヘーゲル主義の最後の一片をも棄て去り、新たな哲学的基礎を獲得すべく別の思想家を模索したという事実である。こうして持ち出したのがカントであつた」(同、一八四頁)——つまり、「ヘーゲルからカントへ」回帰せよという標榜をわれわれはよく理解できるであらう。このカント問題によつてもたらされたいわばベルンシュタインの転回、は、「知的、道徳的、理念的の成熟に社会主義の到来は依存しているし、逆にまた社会主義思想及び運動は、その理念的の成熟を助けるものでなければならぬ。その意味で社会主義思想は真の意味で、科学的である」ともに倫理的なものでなければならぬ」(関、一二九頁、傍点は筆者)と結論づけられる。

マルクスが土台Ⅱ上部構造の図式によつて歴史的必然性を説明するとき、人間の思想と行動、とくに倫理的要因も因果決定性をまぬがれないかのごとく厳密に受けとられがちであつた。カウツキーに

代表されるような正統マルクス主義者がベルンシュタインに反論するのにも、倫理的要因に独立した作用を認めることは、社会主義理論の科学性を真向から否定するものと思われたからである（同、一六二頁）。しかし誤解してはならないが、ベルンシュタインは、歴史における経済的決定的な力を強調したマルクスの功績を積極的に確認すらしている（同、一〇八頁）。この点について、『ベルンシュタインが疑問としたものは決して経済的要因が社会のあらゆる分野に及ぼす強い影響力でも、また内容豊かなマルクス主義のイデオロギー概念でもなかつた。ただ彼はその範囲を限定し、人間の倫理的思考にもつと大きな余地を与えよと主張したのである』（ゲイ、一八三頁）。

そして、ゲイの論じるように、「カントに帰れ」というベルンシュタインの立場は、カント認識論の受容を意味するものでも、カント倫理学の一般的再評価を意味するものでもなく、「……ドイツ社会主義は今こそヘーゲル弁証法的教条主義を正し、倫理的判断の重要性を認め、そのための客観的で明敏な批判精神を必要としているというところに他ならなかつた」（同、一八九頁）のである。

社会主義理論に倫理を導入することは、その到来が科学的に予見できなくなつたというだけでなく、労働者階級がその実現をめざす努力に対して、みずからの倫理的意志を常に保持することを要請する。関教授は、『社会主義の諸前提と社会民主主義の任務』から、「向上をめざす階級は、健全な道徳を必要とし、退廃的倦怠を必要としない。……重要なものは、彼らの掲げる諸目標を貫いている進歩の特徴を、つまりより高度の道徳と正義の観念とを、文化発展のう

ちに指摘するような社会観によつて貫かれていること、これである」を引用した後に、「ベルンシュタインは、労働者の掲げる諸目標をみたすべき原理については、断片的に（自由な人格の完成と確保）ということだけしか述べていないが、カント的な人格の完成の意味についていつているものと理解されるだろう」（同、一三三頁）と記されている。われわれは、ベルンシュタインのかかる精神を「科学的社会主義から倫理的社会主義へ」という言葉で表現してもよいであろう。

もうひとつの誤解——それは「社会主義の最終目標」に関して、「私にとつて目標は無であり、運動がすべてである」と述べてはばからなかつたベルンシュタインが招いた誤解に触れておこう。後に『フォアヴェルツ』誌に発表した論文のなかで、彼はその趣旨を次のように弁明した（ゲイ、八五—八六頁の引用に依る）。「私のい、わゆる〈社会主義運動の最終目標〉の否認は、明らかに運動目標の全面的否定であるとなし得るのか。私のこの言葉がこの意味で受けとられているとすれば、これ程残念なことではない。目的のない運動は波のまにまに漂う漂流船に等しい。なぜならそれは方針のない運動だからである。仮に社会主義運動が目的も方針もなく羅針盤のない船のようにさまざまうべきでないとなれば、それは当然にも意識的な目標である最終目標を持たなければならない。しかしこの目標とは一つの社会変革方法を実現することではない。社会の原則を貫徹することである。……運動の一般的進路を見定め、適切な諸要因を注意深く検討することこそ唯一重要なことである。これさえ出来れば、最

終目的について思い煩らう必要はないであろう」と。だが、この説明を以てしても、ドイツ社会民主党の騒然とした空気を静めるには不十分であり、ベルンシュタインの背信に対する攻撃は止まなかつた。その理由は、もとより彼自身の表現のアンビヴァレンツにもよろうけれども、より根本的には、目的、価値、規範的なものと事実、經驗的なものとの二分法を峻拒するマルクス主義との対立に基因していた。ここにもやはり、カント的な問題がベルンシュタインに色濃く翳を落しており、われわれは、一層明解な回答を『いかにして科学的社会主義は可能であるか』のうちに見出す。そして実際に、この講演のために、一九〇一年のリュベックの党大会で、再び修正主義問題が議題として取りあげられ、ベルンシュタイン非難の決議案が可決されたほどなのであるから(関、一八〇頁)。

右の論文の「まえがき」において、ベルンシュタインは注目に値する問題を提起している。「私にとつて重要なのは、まず、科学的という概念の限界を設定することなのである。しかし、概念のこの限界問題のうらには、私にとつては……そもそも理論的思考一般の限界問題がひそんでいる。そして、この理論的思考の影響を受けるかぎりにおいて、また実践的行動の限界問題がひそんでもいるのである」(佐瀬昌盛訳「科学的社会主義はいかにして可能か」『社会主義の諸前提と社会民主主義の任務』所収、二九四頁。傍点は筆者、以下の引用は本書からのものである)。すなわち、唯物史観と剰余価値生産との科学的発見によつて、資本主義社会の必然的崩壊の認識から社会主義的諸要求を導出するエンゲルスの自己了解——社会主義と科学との同一

性に対して、社会主義者として、ベルンシュタインは、「カントと同じ批判的精神で問いを立てる」(前掲書、三〇五頁)、社会主義と科学とのあいだには内的関連が存在するのか、科学的社会主義は可能なのか、と。

彼によれば、社会主義とは、教義あるいは運動いずれとして把握されようとも、ある種の理想主義的要素が混和しており、われわれの実証的な世界を越えた「一箇の彼岸」あるべきもの(同、三〇六頁)なのである。社会主義がかかる未来像を目標に究極価値として設定し、それを政党の綱領および理論として定式化するわけだが、そのことは経験科学のなし得ることではない。「われわれがここで問題にする科学——社会科学——とは、厳密科学がある種の現象を予決する際にみられるような確実性をもたないし、だから、社会主義が追求する社会秩序についても、いかなる事情があろうと、それが生れるであろうとは予言できないのである。この科学は、予見的にはどのような条件下でこの社会秩序が登場するかという、その条件を開陳し、かつ、その確率度を近似的に述べることができるだけである」(同、三〇九頁)。それ故に、客観的認識としての科学は「不偏性」であり、「事実の認識として、科学はいかなる党派、あるいはいかなる階級にも属しはしない。これとは反対に、社会主義は傾向である」(同、三三三頁)。科学は、探究される現象の究極の原因とか、確認された発展の最終的帰結とかに関して、不可知論に立つ。「科学は、その理論体系を新事実による絶えまなき拡大と修正に対して開放しておくのである。科学にとつては、認識以外のなんら

指導的目的も存在しない」(同、三二九頁)と強調される。

しかしながら、ベルンシュタインは、社会主義の教義がそれに対応する科学から区別されるのは、後者が *often* であるのに前者が *abgeschlossenen* であるとしながらも、両者は無関係であるどころか、「ひとつの親密な関係」にあることをとくに力説する。というのは、「……社会主義は、つねにある程度まで意欲の問題であるが、しかしそれはけつして恣意の問題ではない。意欲された目標に到達するために、社会主義は、社会という有機体の諸勢力および諸関係についての科学を、社会生活における原因と作用についての科学を、道案内人として必要とする」(同、三三二頁)からである。「政党の領域」と「科学の領域」とを自覚的に峻別しつつ、同時に社会主義は、みづからの手段と方法の選択に当つては、科学に依拠して「各時期の社会主義の目的を科学の基礎のうえに立つて測定しようとする」(同、三二六頁)。このような意味においてはじめて、科学的に基礎づけられた社会主義は可能でもあり、必要でもある。そのためには、社会民主党が代表する社会主義には、その目的の価値理念はもとより、認識論的要素に対しても批判的な自己意識——自己正当化はない——が絶えず要求されるのだ。「上昇する階級の運動として所与のものに対する批判という点で、社会主義は他のいかなる党派あるいは運動よりも自由だからである。そして批判における自由こそは、科学的認識の基本条件のひとつなのである」(同、三三二頁)という言葉を、われわれは見過ごすことはできない。ヘルンシュタイン自身が「批判的社会主義」なる名称を提案しているように(同、

三三三頁)、彼の精神を要約的に示せば、関教授も同様に表現されておられるが(関、二二六頁)、次のようになる——「科学的、社会主義から批判的、社会主義へ」。

すでに明らかなごとくに、われわれは、ヘルンシュタインの立場が、カントのそれよりも、むしろウェーバーによつて後に論究された問題圏に近いものであることに気づくであろう。「ヘルンシュタインが主張せんとしたことは、正に同時代の社会学者マックス・ウェーバーが『社会科学の認識と社会政策的認識の客観性』において、価値の領域に属する社会政策の命題を、経験科学的命題として主張しつつあつた、当時の社会政策学会の風潮を批判したのと同じ精神である」(同、一三二頁)と関教授が指摘されるとおりである。さらに同教授は、ベルンシュタインの修正主義的立場が、第二次大戦後、カール・ポパー等の批判的合理主義に継承されている点にも言及されている(同、八七頁)。これは、まさに今後展開されるべき議論であるが、最後に、こうした視点からヘルンシュタインを論じた論文を付け加えてこの批評を結んでおく。Thomas Meyer, Wissenschaft, Wissenschaftstheorie und reformistische Politik in historischer Perspektive, in: Georg Lührs et al., (Hrsg.) Theorie und Politik aus kritisch-rationaler Sicht, Berlin/Bon-Bad Godesberg, 1978, S. 91-115. 『ヘルンシュタイン』(95判、三九一-14頁、一九八〇年、木鐸社)『ヘルンシュタインと修正主義』(A5判、二六四-114頁、一九八〇年、早稲田大学出版部)

奈良和重